

## 挿入節における動詞の直接目的補語非表示

山本 香理

### 0. はじめに

ある事態を述べる際、(1) のようにその事態を断定文で表す他に、(2) のように認知動詞を含む節を添えて発話を構成することがある。その節は休止つきで文中、文末に置くことができる。

(1) C'était signalé dans le journal.

(2) a. C'était, *je crois bien*, signalé dans le journal.

b. C'était signalé dans le journal, *je crois bien*. (Blanche-Benveniste, C. 1989 : 60)

(2) のような挿入節内の動詞は直接目的補語が欠落するという特異性がしばしば指摘される。その直接目的補語の非表示の要因をめぐり、Blanche-Benveniste, C. (1989) は、挿入節内の動詞は直接目的補語を支配する力が弱いためであると指摘している。

本稿の目的は挿入節内の直接目的補語の非表示の要因を解明することである。そのために、挿入節の統語特性や挿入節で用いられる動詞の意味特性、さらに挿入節が文中で果たす機能を論じる。その際、先行研究の記述を検討し、残された課題を示す。

以下では、挿入節およびそれが表す事態を P で、そして P が挿入される文およびそれが表す事態を Q で示すことにする。

## 1. 先行研究の記述

Blanche-Benveniste, C. (1989) は, *que* 節を従える動詞に二種類の機能を認め *verbe recteur fort*, *verbe recteur faible* と呼んでいる. そして, P の含む動詞が *verbe recteur faible* として機能する際に直接目的補語非表示が起こることを指摘する. また, Andersen, H-L. (1996, 2007), Boone, A. (1996, 1998) もこの考えを踏襲している. Blanche-Benveniste, C. (1989) は *verbe recteur faible* を (3) のように定義している.

(3) Je définirai la classe de « verbes recteurs faibles » par la double possibilité de construction qu'ils ont ; on peut les trouver en tête de la construction, suivis d'une *que*-phrase qui a les apparences d'un complément :

*je crois bien* que c'était signalé dans le journal

ou en incise, après la séquence à apparence de complément ( ou à l'intérieur de cette séquence ) :

c'était, *je crois bien*, signalé dans le journal.

c'était signalé dans le journal, *je crois bien*. ( *ibid* : 60 )

1.1. *verbe recteur fort* と *verbe recteur faible*

*croire* は *verbe recteur fort* と *verbe recteur faible* との二つの機能を果たしうる動詞として挙げられている. 次の (4a) は *croire* が *verbe recteur faible* として機能している例である. その場合, *que* 節は形の上では直接目的補語であるが, *croire* は *que* 節を支配する力を持たないとする. その際, (4b) で確認できるように, P を文頭以外の位置に置くことができる. また (4c) のように *que* 節の代名詞化は不自然であると指摘している.

(4) a. *je crois bien* qu'il va pleuvoir.

b. il va pleuvoir, *je crois bien*.

c. ? *je le crois bien*. ( Blanche-Benveniste, C. 1989: 62 )

一方, 次の例の *croire* は *verbe recteur fort* として機能している. その場合, *croire* は *que* 節を支配し, その節を代名詞化することができる.

(5) *je crois qu'il est innocent, **je le crois.*** ( *ibid* : 62 )

ところで接続法の節を従える動詞は *verbe recteur faible* としての機能はないと述べている。そしてその動詞を含む節を接続法の発話のあとに挿入節として用いることができない。しかし直説法の発話のあとに挿入節として用いることは可能である。その場合 *regretter* は自立的な動詞 ( *verbe autonome* ) として用いられており、前の直説法の発話を支配していない。

(6) a. ***je regrette** qu'il ne vienne pas.*

b. \**il ne vienne pas, **je regrette.***

c. *il ne vient pas, **je regrette.*** ( Blanche-Benveniste, C., 1989 : 63 )

また直説法と接続法を従える動詞に関しては、直説法を従える場合のみ挿入節として用いることができる。

(7) a. ***il semble** qu'il était content.*

b. *il était content, **il semble.*** ( Blanche-Benveniste, C., 1989 : 64 )

(8) a. ***il semble** qu'il soit content.*

b. \**il soit content, **il semble.***

c. \**qu'il soit content **il semble.*** ( *ibid* )

以上の指摘をまとめると次のようになる。

(A) *verbe recteur faible* と *verbe recteur fort* の機能が問題になるのは直説法を従える動詞に限られる。その際、P を文頭以外の位置に置くことができるかや *que* 節を代名詞化することができるかが機能を区別する指標となる。

(B) 主動詞が *verbe recteur faible* か *verbe recteur fort* かに応じて主動詞と *que* 節との関係が異なる。主動詞が *verbe recteur faible* として機能する場合、*que* 節を形式的に直接目的補語として従える。一方、*verbe recteur fort* として機能する場合は *que* 節を直接目的補語として支配する。

(C) 接続法を従える動詞は *verbe recteur faible* の機能はなく、*verbe recteur fort* として機能する。

## 1.2. verbe recteur faible と文法化

Blanche-Benveniste, C. (1989) は, verbe recteur faible として機能する際の主語・時制は個々の動詞に応じて固定化されている。上で挙げた (4) から確認できるように, que 節の代名詞化は不自然, または容認されないと指摘している。

例えば croire が verbe recteur faible として機能するのは, 一人称単数・直説法現在形に限られる。このため他の人称, 時制を用いた (9), (10) は不自然, または容認されないと指摘している。

(9) a. ?C'était signalé dans le journal, **tu crois**.

b. ?C'était signalé dans le journal, **ils croiront**. (Blanche-Benveniste, C. 2001 : 86)

(10) \*je **croie** / je **croirais** on fait toutes le même constat. (Andersen, H-L. 1996 : 311)

この他に, verbe recteur faible として機能する場合は verbe recteur fort として機能する場合には課されなかった制約を受けることになる。

例えば, 肯定の平叙文以外は容認されない。

(11) \*C'était signalé dans le journal, **je ne crois pas**. (ibid : 80)

そして次の例のように, 法的助動詞を付加した場合も容認されない。

(12) \*je **peux croire** on fait toutes le même constat.

また, 否定文のみ (13), 法的助動詞を伴う場合 (14) 特定の時制 (15) のみで verbe recteur faible として機能する動詞もある。

(13) a. **il n'empêche** qu'on était malheureux.

b. \***il empêche** qu'on était malheureux. (Blanche-Benveniste, C. 1989 : 65)

(14) Je **ne veux pas dire** que c'est mal. (Bonne, A. 1998 : 106)

(15) elle sortait de Buchenwald, **on aurait dit**. (Blanche-Benveniste, C., 1989 : 66)

以上のように, verbe recteur faible として機能する際の主語, 時制, モダリティは固定化されていることが従来の研究のなかで明らかにされてきた。

そして最近の研究のなかで Andersen, H-L. (2007) は, verbe recteur faible として機能する表現は文法化 (grammaticalisation) されたものであると指摘する。そして, その意味 (signification) は, verbe recteur fort の意味から完全に変わるわけではなく, verbe recteur fort のもつ本質的な意味が緩和され, 主観的, 間主観的な意味へと移行

すると述べている。

では、具体的にどの動詞が *verbe recteur faible* として機能するか、その際どのような意味を表すかを次に見てみよう。

### 1.3. *verbe recteur faible* として機能する動詞

上で確認したように、*verbe recteur faible* は動詞がもつ機能の一つであり、他の文脈で当該の動詞を用いる際、その機能は有効でなくなる。そのことから *verbe recteur faible* として機能し得る動詞を網羅的に列挙することは難しいと考えられる。しかし傾向として、どのような動詞が *verbe recteur faible* として機能し得るかを検討することは、その機能を明らかにする上で有益であると考えられる。そこで、Andersen, H-L. (1996, 2007), Blanche-Benveniste, C. (1989), Boone, A. (1996, 1998) の記述を参考にすると、次に挙げる動詞が *verbe recteur faible* として機能し得るようである。主語の人称別に分類すると以下のようなになる。

#### (A) 一人称

*croire, considérer, dire, estimer, juger, penser, supposer, trouver* («être d'avis»)

#### (B) 二人称

*comprendre* (*tu comprends, vous comprenez*), *écouter* (*écoute, écoutez*), *regarder* (*regarde, regardez*), *remarquer* (*remarque, remarquez*), *savoir* (*tu sais, vous savez*), *voir* (*tu vois, vous voyez*), *vouloir* (*si tu veux, si vous voulez*).

#### (C) その他

*il (ça) n'empêche pas, il semble, il paraît, on dirait, on aurait dit*

Andersen, H-L., Blanche-Benveniste, C., Boone, A. は、一人称の場合、上で挙げた動詞は「être d'avis」に近い意味で用いられると指摘している。これと違って、例えば *trouver* を「découvrir, inventer」の意味で用いる場合は時制、モダリティ等の制約は課されないと指摘している。また *que* 節の代名詞化も容認される。

(16) a. Newton **a trouvé** par des expériences fort exactes, que le poids des corps était proportionnel à la qualité de matière qu'ils contiennent.

b. Newton **a trouvé** cela / Newton l'**a trouvé**. (Bonne, A. 1996 : 48)

ところで先行研究が考察の対象としてきた認知動詞には意味的な共通点が認められる。Kreutz, Ph. (1998), 曾我 (2005) の分類に依拠すると、認知動詞は、叙実述語 ( *prédicat factif* ), 準叙実述語 ( *prédicat semi-factif* ), 非叙実述語 ( *prédicat non factif* ) の三つに分けることができる<sup>(1)</sup>。先行研究のなかで取り上げられてきた動詞は非叙実述語に属する。そして実例を観察<sup>(2)</sup>してみると、このカテゴリーに属するいくつかの動詞が *verbe recteur faible* として機能する例が確認できた<sup>(3)</sup>。では、他のカテゴリーに属する動詞は *verbe recteur faible* として機能し得ないのだろうか。この点については、さらに考察の対象とする動詞の範囲を広げ調査する必要がある。

ところで、なぜ以上のような意味特性を持つ動詞が *verbe recteur faible* として機能し得るかという問題については、次に検討する *verbe recteur faible* の談話的機能から確認することができる。

#### 1.4. *verbe recteur faible* を含む P の機能

*verbe recteur faible* を含む P を添えて発話を構成する際、P が表す認知操作を描写することが発話の対象ではない。発話の真の主張は *que* 以下で述べる Q であり、P は Q に付加されるモダリティ表現として機能している。その場合、P は Q を対象事態として支配する関係になく、Q で言及する事態に外側から関わっている。その結果、P の文中の位置も自由になった。そして、Andersen, H-L. (2007) が指摘するように、P は談話標識 ( *marqueur discursif propositionnel* ) のように振舞うのである。

そして *verbe recteur faible* に関連するモダリティとは Le Querler, N. (1996) の挙げる主観的モダリティと間主観的モダリティに対応している<sup>(4)</sup>。

1. 主観的モダリティ ( *modalité subjective* ) : 発話の主体とその発話の命題内容との関係を表す。発話の命題内容の真偽・蓋然性を示す認識的モダリティ ( *modalité épistémique* ) と命題内容に対する評価を示す評価的モダリティ ( *modalité appréciative* ) とに分けられる。
2. 間主観的モダリティ ( *modalité intersubjective* ) : 発話の命題内容に関して構築される発話の主体とそれ以外の主体との関係を表す。発話者が発話行為によって発話

の主体に行為への促しや行為の禁止を行う義務的モダリティ ( modalité déontique ) が挙げられる。

まず発話の主体が発話者である場合、P の担うモダリティは、主観的モダリティに属する認識モダリティとして機能する。

そして発話の主体が二人称の場合は、P は間主観的モダリティとして機能する。発話者は Q と聞き手との関係を示したり、聞き手に対話への参加を求めることを意図して P を添えて発話を構成するのである。

例えば Andersen, L-H. (2007) は *tu sais / vous savez* を用いる場面として、新しい話題を導入する場面 (17) や言及する事態について理解または同意を求める場面 (18) などを挙げている。

(17) ... moi je voulais *tu sais* j'ai commencé à écrire un bouquin...

( Corpus Orleans t006. txt in Andersen, H-L. 2007 : 20 )

(18) on l'a bien feuilleté hein il y en a des mieux *tu sais* ( *ibid* : 21 )

上で確認したように、先行研究のなかで、*verbe recteur faible* として機能する動詞として非叙述動詞が挙げられていることが多い。そのことと *verbe recteur faible* を含む P が認識的モダリティを表すこととは整合性があると考えられる。それでは、同じく主観的モダリティに属する評価モダリティを表す動詞は *verbe recteur faible* として機能しうるのだろうか。この問題に関しては、評価モダリティは発話者の心的態度を表すことから接続法との関係が想定されるので、さらなる調査が必要である。

## 1.5. まとめ

以上、先行研究の記述を参考にしつつ挿入節の統語特性や用いられる動詞の意味特性、そして文中での機能を中心に論じた。そして以下の点を確認した。

(A) 基本的に文頭、文中、文末に自由に現れることができる。

(B) *verbe recteur faible* として機能する際、主語、時制、モダリティは固定化されている。

- (C) P を添えて発話を構成する際、その真の主張は Q であり、P はモダリティ表現として機能する。そのとき、P は談話標識のように振舞う。
- (D) 発話の主語が発話者である場合、P は Q の確からしさの度合いを示す認知的モダリティを表す。一方、発話の主語が聞き手である場合、P は間主観的モダリティを表し、聞き手にある行為の実現を促す。
- 以上のように言及する事態 Q を聞き手がどう捉えるべきかを示すモダリティ表現として P を添える際、その P が含む動詞は直接目的補語が起こる。

## 2. 解明すべき課題

先行研究の記述で不十分であると考えられる点を以下に示す。

- (A) *verbe recteur faible* として機能する動詞として、非叙実動詞に属する動詞が先行研究の中で挙げられてきた。それでは叙実動詞、準叙実動詞に属する動詞は *verbe recteur faible* として機能し得るのだろうか。
- (B) *verbe recteur faible* を含む P は認知的モダリティを表すことを確認した。それでは、同じく主観的モダリティに属する評価モダリティを表す動詞は *verbe recteur faible* として機能し得るのだろうか。その問題に関しては、接続法を従える動詞が *verbe recteur faible* として機能しないという従来の指摘に関連していると考えられる。その指摘の妥当性を検証するとともに、その要因を明らかにしなければならない。
- (C) Andersen, H-L. (2007) は *verbe recteur faible* が談話標識として文法化されていると指摘しているが、どの動詞がどの程度文法化が進んでいるか、またその動詞がどのような意味を表すのか。また *verbe recteur fort* と比べどのような制約が課され、または解かれるのだろうか。
- (D) *verbe recteur faible* として機能する動詞の中には *que* 節だけでなく、不定詞も従えることができる動詞が含まれている。両形式は等価でなく、発話者が聞き手に伝えようとする情報に応じて形式を選択している。そこで問題になるのは、どの形式の際に文法化が起こるかということである。

(19) a. Je **crois être** capable de réussir / que je *suis* capable de réussir.

b. Je **pense avoir attrapé** la grippe / que j'*ai attrapé* la grippe.

(Dubois, J. et al. 1973, cité par 曾我 1992 : 206)

以上の点を使用実態の観察や面接調査をさらに進め明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

(1) 曾我 (2005) は以下の動詞を挙げている。

(A) 叙実述語 : admettre, apprendre, comprendre, deviner, ignorer, oublier, piger, réaliser, reconnaître, saisir, savoir.

(B) 準叙実述語 : constater, déceler, découvrir, flairer, pressentir, remarquer, sentir, voir

(C) 非叙実述語 : compter, concevoir, considérer, croire, douter, espérer, estimer, imaginer, juger, penser, présumer, prévoir, songer, soupçonner, supposer, trouver

(2) 映画のシナリオ (65 作品), 演劇の脚本 (14 作品), 小説 (85 作品)を使用。

(3) (a) Octave : Il est là?

Louise : Il est parti, **j'espère**. (Rohmer, E. 1999, *Les nuits de la pleine lune*)

(b) Votre enfant doit avoir un père aussi, **j'imagine**.

(Kawabata, Y. 1968, *Le grondement de la montagne*)

(4) この論考では発話の主体 ( sujet énonciateur ) を基点をして三つにモダリティを区別している。主観的モダリティと間主観的モダリティの他に客観的モダリティ ( modalité objective ) を挙げている。客観的モダリティとは、発話の主体がある命題を他の命題に従属させる際のモダリティである。上で挙げた認識的モダリティや評価的モダリティとは独立したものである。具体的には、条件、結果、目的、対立といった関係を示すモダリティである。

## 参考文献

ARRIVÉ, M. et alii. (1986) : *la grammaire d'aujourd'hui* Flammarion.

ANDERSEN, H-L. (1996) : “Verbes parenthétiques comme marqueurs discursifs”, *Dépendance et intégration syntaxique —subordination, coordination, connexion*, éd. MULLER, C. Max Niemeyer Verlag. 307-315.

—— (2007) : “Marqueurs discursifs propositionnels”, *Langue française* 154, 13-28.

BLANCHE-BENVENISTE, C. et alii. (1984) : *Pronom et syntaxe L'approche pronominale et son*

- application au français*, Paris, SELAF.
- (1989) : “Construction verbales en incise et rection faible des verbes”, *Recherche sur le français parlé* 9, 53-74.
- (2001) : “Auxiliaires et degrés de « verbalité »”, in *Les grammaires du français et les « mots outils »*, *Syntaxe & Sémantique* 3, Presses Universitaires de Caen, 75-97.
- BOONE, A. (1996) : “Les complétives et la modalisation”, *Dépendance et intégration syntaxique — subordination, coordination, connexion*, éd. MULLER, C. Max Niemeyer Verlag, 45-51.
- (1998) : “La pronominalisation des complétives objet direct”, in *Analyse linguistique et approche de l’oral*, éd. BILGER, M. et alii., Uigeverji Peeters Leuven, 103-114.
- BOONE, A. et LEARD, J.-M. (1995) : “L’alternance SN / que P : arguments sémantiques et arguments syntaxiques”, in *Tendances récentes en linguistique française et générale*, éd. SHYLDKROT, H. B.-Z. et KUPFERMAN, L., 75-94.
- BORILLO, A. (1982) : “Deux Aspect de la modalisation assertive : croire et savoir ”, *Langage* 67, 33-53.
- CARON, P., PAILLARD, M. et VIGNERON, A. (2003) : “ En espérant que vous lisiez cet article... À propos du subjonctif après espérer que ”, in *Verbes de parole, de pensée, de perception étude syntaxique et sémantique*, ed. Chuquet, J. Presses Universitaires de Rennes, 75-92.
- CORNULIER, B. (1978) : “L’incise, la classe des verbes parenthétiques et le signe mimique”, *Cahier de Linguistique de l’Université du Québec*, n° 8, *Syntaxe et sémantique du français*.
- CHARAUDEAU, P. (1992) : *Grammaire du sens et de l’expression*, Hachette.
- DELAVEAU, A. (2001) : *Syntaxe La phrase et la subordination*, Armand Colin.
- GREVISSE, M. (1986) : *Le Bon Usage Grammaire française*, Duclot, 12<sup>ème</sup> édition.
- KREUTZ, Ph. (1998) : “Une typologie des prédicats factifs”, *Le français moderne* 66-2, 141-181.
- LEEMAN, D. (2002) : *La phrase complexe Les subordinations*, de boeck. duculot.
- LE GOFFIC, P. (1993) : *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.
- LE QUERLER, N. (1996) : *Typologie des modalités*, Presses Universitaires de Caen.
- POUGEOISE, M. (1998) : *Dictionnaire de grammaire et des difficultés grammaticales*, Armand Colin.
- RECANATI, F. (1984) : “Remarques sur les verbes parenthétiques”, in *Lingvisicoe Investigaciones Supplementa*, Vol 8, éd ATTAL, P. & MULLER, C. John Benjamins Publishing Company, 319-352.
- RIEGEL, M. (1993) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France.
- URMSON, J.-O. (1963) : “Parenthetical verbs” (1949), in *Philosophy and Ordinary Language*, éd. CATON, C.-E., Urbana : University of Illinois Press, 220-241.
- WILMET, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Duculot.

秋元実治 (2002): 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房.

秋廣尚恵 (2005): 「直接目的補語のゼロ化—La réalisation zéro du complément d'objet direct—」『フランス語学研究』 39, 44-58.

朝倉季雄 (2002): 『新フランス文法事典』 白水社.

曾我祐典 (1992): 『フランス語における状況の表現法—構文・動詞叙法の選択—』 白水社.

—— (2005): 「他者の思考内容の現実性についての評価」『フランス語を探る フランス語学の諸問題 III』 東京外国語大学グループ「セメイオン」 三修社, 132-141.

渡邊淳也 (2004): 『フランス語における論証性の意味論』 早美出版社.

(博士課程後期課程)